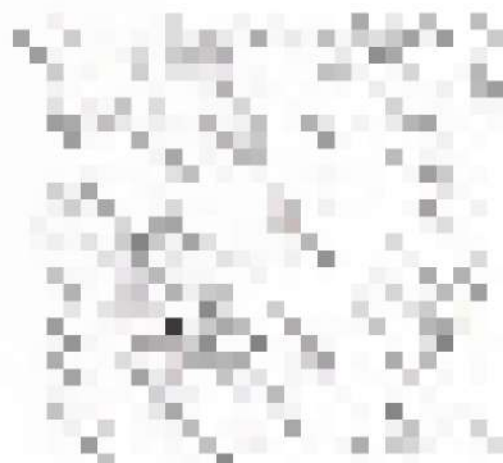




Lucerne Festival 2022

ルツェルン音楽祭 2022

▼8月9日～9月11日

取材・文 中東生
Izumi Shindoh Naka

今年のテーマは「多様性」

8月9日～9月11日まで開催された今年のルツェルン音楽祭は、のべ7万人が訪れた。テーマは「多様性」で、とくに昔のクラシック音楽界では活躍の場を得られなかった黒色人種に焦点を当て、ガーシュウィン《ポーギーとベス》のような著名作品はもちろん、認知度の低い作曲家や楽曲を紹介する役割も果たした。たとえばマラー室内管弦楽団は、当時モーツァルトのライヴァルでもあった聖ヨルジュことジョゼフ・ボローニウの交響曲を披露したあと、イザベル・ファウスト(VI)とアントワ

ン・タメステイ(Va)をソリストに迎え、モーツァルト「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲」、そして「交響曲第36番《リンツ》」と組み合わせ、室内楽の饗宴を聴かせた。

今年の新星アーティスト二人も黒色人種だ。作曲家のタイシヨーン・ソーリーはルツェルン音楽祭コンテンポラリー管弦楽団と異色な世界を創り上げた。堀真亜葉がヴァイオリン・ソロを担ったスイス初演曲のあと、指揮しながらキーワードを紙に書き、オーケストラの即興をつなげて約1時間の曲を作り上げて見せたのだ(以上、8月28日)。

もう一人はゴルダ・シユルツ(S)で、

すでにCD（『女性作曲家の歌曲集』）も出しているが、女性作曲家の作品集でのリサイタルでは、オープンな歌声を通して聴衆と交流した。

ヤニック・ネゼリセガン率いるフィラデルフィア管弦楽団もエンジェル・ブルー(S)を迎え、コールマンが彼女のために書いた『Not a Small Voice』を演奏したが、彼女の温かい声は堪能できなかった。唯一、白人と男性であるネゼリセガン指揮のベートーヴェン「交響曲第5番『運命』」は、超速で押し出しの強い演奏だったが、聴衆を沸かせ、最後はこのオーケストラが力を入れているフロレーンス・ブライス「交響曲第1番」で、黒人女性讃歌をうたい上げた。

フロレーヌが設立した ペルー・ユース・オーケストラ

彼らのアメリカ的な演奏が大味に感じられたのは、午前中にサイモン・ラトル率いるロンドン交響楽団を聴いたからかもしれない。輝かしい迫力のベルリオーズ『海賊』序曲、マーラー「交響曲第1番『巨人』」から『花の章』、現代作曲家タニエル・キーデインに委嘱した『サン・ボエム』、シベリウス「交響曲第7番、ラヴェル『ラ・ヴァルス』の自由さと多彩さで琴線に触れた（以上9月4日）。今年いちばん驚いたのは、スイス人作曲家データー・アーマン「ピアノ協奏曲」のスイス初演だ。共演者であるスザンナ・マルツキ（指揮）、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団とすでにCDも出しているが、鬼気迫るパワーで弾ききったソロのアンドレアス・ヘフリガーに聴衆も大喝采を浴びせた。前後に置いたサーリアホヤシベリウスも研ぎ澄まされた音が印象的だった（8月30日）。

10月号の「海外レポート・スイス」に書いた以外のクライマックスは、ファン・ディエゴ・フロレーヌ(T)が自身で設立したペルー・ユース・オーケストラとの共演だ。前半のオペラ曲は指揮のロベルト・ゴンザレス・モンハスが若者を上手くまとめ、歌手の歌わせかたが経験不足で、フロレーヌに負担がかかっていたが、後半の南米音楽では、いままで無表情だった団員たちも踊り出し、ペルー色に染まった（9月2日）。



ペルー・ユース・オーケストラの公演から。設立者のフロレーヌ(左)と指揮のゴンザレス・モンハス(右) ©中東生

